HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	現代高校生の生活と性行動
Author(s)	鈴木, 佳代
Citation	教育福祉研究, 9, 37-49
Issue Date	2003-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/28358
Type	bulletin (article)
File Information	9_P37-49.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

[Journal of Education and Social Work No.9 2003
教育福祉研究　第9号　2003]

現代高校生の生活と性行動

鈴　木　佳　代

1．はじめに

近年、若者の性をめぐる状況は大きく変化している。1980年代頃まで、思春期の性行動は「非行少年」（その多くは女子非行少年）による問題として扱われる傾向が強かった。しかし1990年代以降、若者の性行動は大人の予想をはるかに上回るかたちで「日常化」し[1]、もはや一部の若者だけがかかわる問題としては捉えられなくなっている。諸研究によれば、ほとんどの若者は性行動を婚姻関係内に限定されるものとは考えておらず[2]、2002年に東京都内で行われた調査では、高校3年生男子の37.3%、女子の45.6%が性経験を持っていることが明らかになった。1987年の同調査における高校3年生の性経験率が男子27.7%、女子18.5%だったことと比較すれば、この15年間に若者の性行動が活発化してきたことについて疑う余地はないだろう[3]。しかし、はたしてこうした変化はわが国のあらゆる層の若者の間で均質に広がってきた現象なのだろうか。

海外の研究においては、若者の性の活発化が社会的資源の不平等に起因する生活の困窮や、そこから生じる将来展望の暗さ・不透明さと密接なつながりを持っていることが明らかになっている。さらに、そのような社会的不利を負うことは若者の性行動そのものを生み出すだけでなく、避妊を伴わない性交や複数の性的パートナーとの性行為など、ハイリスクな性行動の要因にもなると指摘されている[4]。たとえばTopolski et al.（2001）は、社会的・身体的要因を含めた生活の質（QOL）が若者の健康上のリスク行動と密接に結びついており、性行動を取っていない若者は概してQOL値が高いことを明らかにした[5]。また、Danziger（1995）が15歳から20歳のアフリカンアメリカン女性に行ったライフヒストリーの聞き取りによれば、初交年齢が高い女性や10代で出産しても学校を続ける女性は、家族や自分に対して肯定的な意識を持つ傾向があった。さらに、低年齢での初交や学齢期の出産につながる要因は学校生活と家庭生活の両面において認められ、しかも学校生活への適応状況の分化は小学校低学年というかなり初期の段階から始まっていた[6]。社会的に不利な状況におかれることこそが若くして親になる道を選び取らせるのだと主張するLuker（1996）は、10代の妊娠と出産に関して「10代の親とは、子どもを産んだという理由のみによって貧乏になった中産階級の人々ではなく、むしろはじめから貧乏だったために親になった人々だ」と述べている[7]。

これらの研究は、若者の性行動を個人の選択としてだけでなく、社会経済的な影響を強く受けるものとして考えることの重要性を示唆している。日本でも「非行少年」研究の中では、不安定な生活と若者の性行動とを結びつける視点が用いられてきた[8]。しかし性の「日常化」が指摘されて以降、わが国では若者の生活状況と性行動との関係について社会経済的な視点を交えた研究はほとんど行われていない。若者の性行動が日常化し、性の問題が個人の自由な選択として受け取られがちな今日、生活状況との連関という視点から若者の性行動を捉え直すことは、社会的資源の不平等が子どもや若者に及ぼす影響について改めて問い直すうえでも大きな意味を持つと考えられる。

本研究は、筆者が北海道内の4つの高等学校で実施した「高校生の性と生活状況に関するアンケート調査」のうち、同一学区内にある2つの学校の

データをもとに、高校生がおかれた家庭や学校の状況や、その中で彼らが抱いている意識や展望が、性行動との関連においてどのような影響を与えているのかについて明らかにするとともに、今後の展望について考察しようとするものである。

2．調査の概要と仮説の設定

（1）調査方法と分析対象

調査は2002年8月から10月、A校～D校の各高等学校に委託する形で行い、調査時には各学級担当の教職員が用紙の配布・説明・指示・回収を行った。調査は集団自記法によって行い、担当教職員の判断により15～20分の回答時間を設けた。回答の精度を高めプライバシーを守るため、回答時間中は教職員の介入をなくした。回答後は回答者本人に用紙を封入してもらい、学校単位で回収した。本稿ではとくに社会階層差に焦点化した分析を行うため、同一の学区内にあるB校とC校を分析の対象とし（その根拠については下記に示す）、有効回答男子589票、女子426票、計1,015票を分析に使用した。

調査は、(1)家庭の状況　(2)自己イメージ　(3)性行動・性意識　(4)将来の展望　の4部からなっている。(3)性行動・性意識　については、性経験の有無によって異なる質問群を設け、該当するものに回答するよう用紙内で指示した。

また、生徒のプライバシー保護上、性経験の有無によって回答時間のずれができるだけ生じないように、調査用紙とともに時間調整用の質問紙を配布した。この時間調整用紙の回答率は8割を超えており、本稿では質問項目のうち(5)ハイリスクな性行動に結びつきやすいと考えられる心理状態への共感　(6)子どもの性に対する親の考え方・態度の感じ方　に関する一部の項目を分析に使用した。

（2）分析対象校の状況

今回の分析に用いたのは、北海道の中規模都市にある全日制普通科高校2校であり、入学時の生徒の学力レベルは2校間で異なっている。B校は学力的にやや上位から中位の生徒が集まっており、男女比はほぼ等しい。卒業後に就職するものは1割程度であり、ほとんどの卒業生は大学・短大・専修学校のいずれかに進学する。それに対してC校は学力的に下位層の生徒が多く、男女比が8対2と男子の割合が高い。卒業生のうち大学・短大に進学するものは2割程度で、6割は高校卒業を最終学歴として社会に出て行く。

また、B校とC校の間では父親の職業や家族構成に大きな違いが認められた。学力レベルが比較的高いB校では父親がホワイトカラー職についている割合が高く、ひとり親家庭が少ないのに対し、学力下位校のC校では母子家庭を中心とするひとり親家庭が2割を超えており、父親が比較的不安定な職種に従事している割合が高い。学力や学歴達成と社会階層との間に相関関係があることは周知のとおりであるが、今回の調査でも家族構成や父親の職業には学校間で有意な差が認められた。したがって、B校とC校との学力階層は生徒の社会階層を反映したものだといって差し支えないだろう。

表1　分析対象校の特徴

	学力レベル	男女比（%）	男子 B校：C校	女子 B校：C校	有効回答率(%) 男子／女子	進路概況(%) (大学・短大：専修学校：就職：他)
B校	やや上位～中位	46：54	52	84	99／98	40：34：10：16
C校	下位	82：18	48	16	90／99	20：17：46：17

表2　B校とC校の家族構成・父親の職業　(%)

	家族構成		父親の職業				
	ふたり親家庭	ひとり親家庭	会社員	公務員・教員	自営業	農林漁業・建築業	無職
B校	86.0	12.4	43.4	23.7	15.4	10.3	2.2
C校	73.2	22.3	39.3	11.5	12.6	23.7	5.9

表3　B校とC校の交際経験・性経験の割合　(%)

		男子			女子		
		1年	2年	3年	1年	2年	3年
交際経験	B校	51.6	66.3	59.1	58.5	72.3	72.4
	C校	55.1	64.9	66.9	85.0	85.7	82.6
性経験	B校	12.9	28.9	40.0	14.5	35.5	56.6
	C校	30.1	42.4	46.1	45.0	71.4	85.7
性経験者／交際経験者	B校	27.0	44.4	66.2	25.0	50.0	77.6
	C校	52.1	65.6	66.0	53.3	82.4	94.4
性経験者／現在交際中	B校	46.2	61.9	89.3	30.8	69.7	84.2
	C校	73.9	90.0	88.0	50.0	100.0	100.0

(3) 分析対象校間の性経験率の差

これら2校では性経験率の有無に大きな差があり、C校では性経験率だけでなく交際経験率や、交際経験者のうちに占める性経験者の割合も高かった。また、3年生では2校間で性経験率にそれほど開きはないものの、1年生の段階では大きな差があることから、C校ではB校より早い段階で初交を経験する傾向があると考えられる。

性経験者が多い学校と少ない学校とが分化していることは、日本性教育教会の調査によって明らかにされている[9]。しかし同調査において、性意識に関する学校間の有意差は認められなかった。一般に、現在の高校生のほとんどは同世代の性行動に対して許容的な考えをもっている。今回の調査でも、生徒の大多数は性行動に対して許容的であり、性行動に対する意識に2校間で有意な差は認められなかった。また、「愛情のないセックス」や「金銭を介したセックス」に対する意識についても、2校間で大きな差はなかった。このように、意識の面では違いがないにも関わらず、実際の性経験率が学校間で大きく異なっていることは、生活の中に性行動を促進する何らかの要因があることを示している。渡辺（2001）は、学校内部における友人間の密接なコミュニケーションが学校間の性経験率の差を生み出す要因となっていると述べているが[10]、友人間の相互作用のみがこうした差を生む要因になっているとは考えにくい。

ここで注目したいのが、海外の先行研究で指摘されている、家庭内の問題や将来展望の暗さ・不透明さが性行動にあたえる影響である。高校生の生活において将来展望が最も明確な形で現れるのは、おそらく卒業後の進路であろう。そこで、ここでは目標学歴とその目標学歴を生む背景、さらにそれらが高校生の生活にあたえる影響を分析することで、高校生が性行動に結びついていくひとつの筋道を示してみたい。

3．目標学歴を説明要因とした性経験の差

(1) 目標学歴の違い

「あなたはどこまで勉強を続けたいと思いますか」という問いについて、B校男子では大学・大学院までを目標学歴とするもの（大学志向群）が6割、短大・専修学校を目標学歴とするもの（専修学校志向群）と、高校卒業後すぐに就職することを希望しているもの[11]（就職志向群）とが2割ずつであったのに対し、C校では半数以上が就職志向群であり、大学志向群は1割強であった。また女子においては、専修学校志向群が4割強という点では両校とも同じだったが、学力レベルの高いB校では大学進学を希望するものが多く、就職志向群と大学志向群の比率は2校間で逆転していた。さらに、2校間では将来の具体的な希望（職業や実現したい夢）があるものの割合も異なっていた。C校はB校と比べて具体的な希望をもっているものの割合が低く、特に男子ではこの傾向が顕著であった。

ところで、高校生の目標学歴は何によって規定されているのだろうか。ひとつには、学校そのものがもつ要因があると考えられる。高校入学時に学力による生徒のふるいわけが行われることに加え、生徒の学力レベルに対応した形で高校ごとに授業の難易度や進度が異なっていることは、高校

卒業後の進路を方向付けるひとつの力として働いていると言えるだろう。また、異なる要因として、家庭の影響が考えられる。目標学歴や学力と出身家庭の職業階層の連関については教育社会学において多くの研究が行われ、その連関が明らかにされているが、以下では調査結果を用い、家庭の状況が子どもの目標学歴や勉強に対するコミットメントに及ぼす影響について、さらにそれが性行動に及ぼす影響について説明していく。

表4　B校とC校の目標学歴と将来の具体的な希望（%）

	目標学歴			将来の具体的な希望がある
	高校以下	短大・専修	大学以上	
B校男子	18.4	19.0	60.6	60.7
B校女子	14.2	44.6	37.1	39.4
C校男子	54.8	30.9	12.1	70.9
C校女子	43.1	43.1	10.3	61.4

（2）目標学歴の規定要因①　家庭環境

家庭環境が子どもの目標学歴や家庭学習に与える影響を説明する概念のひとつに、「文化資本」がある。生徒個人の所有物についてみてみると、ホワイトカラー層の多いB校では勉強机の所有率が高いのに対し、ブルーカラー層や母子世帯の多いC校ではテレビを所有している生徒が多く、勉強机をもっていないものが3分の1を占めていた。また、父親の職業別に勉強机とテレビの所有率についてみてみると、会社員・公務員・教員などの父親をもつ生徒は勉強机の所有率がテレビの所有率を上回っているのに対し、農林漁業や建築業、その他のブルーカラー職の父親を持つ生徒ではテレビの所有率が勉強机を上回っていた。ホワイトカラー職の父親を持つ子どもは勉強へのコミットメントをもつことがより容易な環境にあることから、ホワイトカラー層の多いB校の生徒は勉強を中心とした生活を送るのに適した生活で過ごしており、C校ではそうでないものが比較的多いと考えられる。

もうひとつの家庭環境の要因は、家庭内のトラブルである。C校では家が狭いことや収入が少ないことなど、経済的な悩みを抱えているものが多いのに加え、離婚や再婚、家族の暴力などの家庭内の問題で悩んでいるものも比較的多かった。家庭内のトラブルは、子どもが家庭生活の中で不安や心配をかかえる原因となり、落ち着いた生活を送ることを困難にしてしまう。その結果として勉強離れや学力不振が起こることは当然の帰結であろう。実際に、家庭学習をしていない生徒や目標学歴の低い生徒では、対照群に比べて家庭内の問題で悩んでいるものの割合が高かった。

表5　家庭環境と家庭内の悩み　（%）

		自分の勉強机をもっている	自分のテレビをもっている	離婚や再婚	経済的問題	家が狭い	親の無理解	親に(あまり)大切にされていない	家の居心地が(あまり)よくない
学校	B校	94.9	62.2	4.6	23.8	19.1	17.1	11.2	20.1
	C校	66.2	81.1	6.9	32.3	33.8	20.4	27.4	32.3
家庭学習	している	94.6	63.9	5.1	22.7	19.0	17.1	14.8	22.0
	していない	76.5	73.4	5.7	30.5	28.8	19.2	18.9	26.3
目標学歴	高校以下	74.6	72.7	5.1	33.2	35.7	23.5	23.8	28.5
	短大・専修	86.6	67.8	5.6	29.8	21.1	16.4	15.7	22.9
	大学以上	94.7	65.5	4.2	17.6	16.2	12.9	10.1	19.0
家族構成	ふたり親家庭	87.7	68.3	3.6	24.2	21.7	18.7	16.6	23.4
	ひとり親家庭	76.8	68.8	13.9	40.0	33.8	16.8	17.1	26.6
父親の職業	会社員	88.5	66.9	2.5	25.8	21.1	20.3	15.0	21.1
	公務員・教員	93.1	62.5	3.0	13.3	14.8	15.7	16.7	24.8
	自営業	85.8	63.7	8.3	24.6	20.3	18.9	13.8	26.4
	農林漁業・建築業	79.2	81.6	5.6	26.0	25.6	17.1	22.7	23.6
	無職	65.5	75.0	3.4	41.4	44.8	10.3	25.0	34.4
	その他	85.7	75.5	4.1	32.7	34.7	22.4	24.5	40.6
	不在	72.1	69.1	15.1	45.0	37.8	16.9	13.4	23.9

（3）目標学歴の規定要因②　家庭の経済状態

特に進学に関して家庭があたえる影響が大きいと考えられるのが、家庭の経済状態である。義務教育以降の教育費のほとんどを家庭が負担しなければならない現在の教育システムにおいては、高校卒業後の進学に際し、家庭の経済的な状況が大きなハードルになることがしばしばある。実際に、目標学歴別に家庭の経済的な問題について見てみると、高校群では3人に1人が経済的な問題で悩みをもっており、その割合は大学群の2倍近くにのぼっていた。

たとえ家庭の経済状態が子どもの進学を規定しているとしても、それが子どもの将来の生活やライフチャンスにほとんど不平等をもたらすことがないのだとすれば問題はないだろう。しかし、今日の社会において学歴は大きな影響力をもっており、学歴達成が低いものは就職や収入の面で多くの不利を負うことになる。また、たとえそうした格差があったとしても、そのことを知った上で子ども自身が自己実現のために主体的・積極的に選択した結果としての進路希望であればまだ問題は小さいかもしれない。しかし以下に示すように、現実にはむしろ逆のことが起こっている。

表6からわかるように、将来に対する具体的な希望を持っている生徒は専修学校志向群に多く、就職志向群や大学志向群では比較的少ない。専修学校志向群の生徒の多くは目標とする具体的な職業をもっており、そのための技術習得を目的とした進路選択をしているのだと考えることができる。しかし、就職志向群と大学志向群のそれぞれにおいて具体的な希望のなさがもつ意味は、全く異なるものだといってよい。なぜなら、大学に進学すれば具体的な職業を決定するまでに4年間の「猶予期間」があることに加え、大卒資格が就業機会を広げてくれるのに対し、高校卒業後すぐに就職する場合には、半年から2年半という短い期間の後に、限られた就業機会の中で職業人生をスタートさせなければならないからである。だがそれにもかかわらず、実際にはむしろ就職志向群で具体的な希望を持っていないものがより高い割合を占めている。このことは、就職志向群の生徒のかなりの部分が、自己実現につながるような積極的な意味合いをもって就職という進路を選択しているというよりもむしろ、人生の方向性が定まらない

表6　経済的な悩み・勉強へのコミットメント・将来の希望　(%)

		目標学歴			家庭学習をしている	勉強机をもっている	将来の具体的な希望がある	アルバイトをしている	生活の中で恋愛の比重が高い
		高校以下	短大・専修	大学以上					
経済的な悩み	ある	36.2	28.8	25.0	40.3	79.2	57.6	19.7	12.8
	ない	25.9	32.5	41.7	50.2	86.8	60.2	15.0	9.3
家族構成	ふたり親家庭	25.1	36.2	38.7	49.1	87.7	60.0	14.4	10.2
	ひとり親家庭	39.9	26.6	33.6	44.2	76.8	59.9	25.8	8.9
父親の職業	会社員	25.8	37.4	36.8	49.5	88.5	60.4	13.8	8.4
	公務員・教員	12.0	32.9	55.1	61.8	93.1	69.5	7.5	9.0
	自営業	18.9	40.5	40.5	41.7	85.8	57.9	13.4	8.5
	農林漁業・建築業	37.2	34.5	28.3	44.4	79.2	48.2	18.5	15.4
	その他	41.0	35.9	23.1	34.7	85.7	68.9	29.2	9.6
	無職	58.3	20.8	20.8	37.9	65.5	48.0	24.1	13.3
	不在	43.8	24.1	32.1	40.3	72.2	53.6	26.8	15.4
将来の具体的な希望	ある	19.7	44.2	36.1	54.7	88.7	—	15.7	10.2
	ない	39.0	20.1	41.0	41.7	83.0	—	14.3	9.5
家庭学習	している	17.0	39.9	52.0	—	94.6	54.7	10.4	7.4
	していない	39.3	40.0	23.7	—	76.5	45.3	21.4	12.2
勉強机	もっている	24.4	34.1	41.8	53.0	—	61.2	15.0	8.4
	もっていない	52.4	33.1	14.5	17.4	—	49.6	22.3	19.7
アルバイト	している	39.4	44.4	16.2	30.2	79.4	61.6	—	12.9
	していない	26.2	32.1	41.7	50.5	86.2	59.0	—	8.9

まま実社会に出て行かざるを得ない状況におかれていることを意味している。とくに、ひとり親家庭の生徒、無職の父親やブルーカラー職の父親を持つ生徒において就職志向群の占める割合が顕著に高いことは、こうした世帯の子どもが低学歴にとどめおかれがちになっていることを示している。さらに表5からは、生徒が経済的な悩みを持っているか否かは家族構成や父親の職業によって大きく規定されており、さらに家庭の経済状況が目標学歴の高さや家庭学習の有無に影響をあたえていることがわかる。

（4）自己実現のオルタナティブと性経験

目標学歴の違いは、性経験の有無に大きな違いをもたらしていた。大学志向群では性経験のあるものが4分の1に満たないのに対し、就職志向群・専修学校志向群では4割近くに性経験があった。

しかし性経験の有無に関しては、目標学歴の高低以上に、家庭学習やアルバイトの有無が強い連関をもっていた。家庭学習をしている生徒の場合、性経験率は25.4%だったのに対し、家庭学習をしていないものでは45.5%に性経験があった。また、アルバイトをしていない生徒の性経験は32.1%だったが、アルバイトをしているものの性経験率は56.3%に達していた。アルバイトをしている生徒は年上の恋人を持っている傾向があったことから、彼（女）らは性行動に結びつきがちな状況にあり、アルバイトは金銭を手に入れる場としてだけでなく、学校外の人間との出会いの機会を増やす場としても機能していると考えられる。家庭学習やアルバイトの有無が性行動との関係において強い結びつきを持っていたことは、現在の生活においてどんなことが生活の中心となっているかが、性行動を決定するより大きな要因となっていることを示唆している。

では、生活の中心となるものはどのように決定されていくのだろうか。高校卒業後に大学に進学することをめざしている場合には、勉強が中心となることが多い。大学志向群の生徒は7割近くが家庭学習をしており、アルバイトをしているものはごくわずかであった。それに対し、就職志向群では家庭学習をしているものが3割に満たず、2割強の生徒はアルバイトをしていた。就職志向群の生徒の場合、3節の(2)で論じたように、勉強する環境そのものが整っていないことも多い。さらに、勉強する上で大学受験のような具体的な目標がないとなれば、勉強以外のことに生活の中心が置かれるのは自然なことだろう。そうした状況において、恋愛やアルバイトは、自己承認や金銭という具体的かつ直接的な利益をもたらしてくれるひとつの手段となる。現在の生活において、もっとも頑張っていることとして「恋愛」をあげた生徒の割合が、勉強机をもっていないものの間では対照群の2倍を占めていたことからも、勉強して進学することをめざすコースから「降りた」生徒のほうが恋愛に傾倒しやすいことはうかがわれる。希望する（あるいはより有利な）職業につくことを見据えた長期的な自己実現をめざしている生徒とくらべると、そうした手段をもたない生徒・もてない生徒が恋愛やアルバイトを自己実現の手段として見出した場合、彼(女)らが性行動に結びつく可能性ははるかに高いものとなるだろう。

学校間で見られた性経験率に大きな差が存在するのは、学校間に存在する学力差が卒業後の展望や勉強へのコミットメントの差を伴うことによって、自己実現の手段に違いが生じるからだと考えられる。そしてこうした道筋を規定する大きな要因になっているのが生徒の置かれた家庭環境であり、社会的に不利な状況にあるものほど性行動へと結びつきがちな状況に立たされているといえる。

表7　目標学歴・勉強へのコミットメントと性経験（%）

		性経験がある
目標学歴	高校以下	39.2
	短大・専修	38.4
	大学以上	24.3
家庭学習	している	25.4
	していない	45.5
アルバイト	している	56.3
	していない	32.1

4　社会的不利が性行動・性意識にあたえる影響

第3節では目標学歴を媒介として、高校生がどのような形で自己実現を図ろうとするかが若者の性行動に影響をあたえていること、そして若者の進路選択や自己実現に対して家庭の状況が大きな規定要因となっていることについて論じてきた。しかし、調査の回答者の3分の1に性経験があることを考えれば、性経験があるものの中にもさらに多様性があると考えられる。海外の先行研究は、不利な生活状況の中で育ち、その結果として明るい将来展望を抱けないことが若者のハイリスク行動を増大させることを明らかにしているが、日本でも同様の傾向が存在する可能性があるだろう。ここではハイリスクな性行動を、「望まない妊娠に至ったり、性感染症に罹患したりする可能性を高める性行動」として定義し、こうした行為を導く可能性が高まると考えられる思春期初期の性行為や、パートナーとの間で意思疎通が十分はかれていない交際初期の性行為、10代で子どもを持ちたいと考えるような心理状態も含む以下の8項目をハイリスク行動として設定し、彼らの性行動や性意識、生活背景の特徴について検証した。

① 避妊を（いつも／あまり）していない
② 累積セックスパートナー数が多い(5人以上)
③ 複数のセックスパートナーがいる
④ 性行動の頻度が高い（週2回以上）
⑤ 初交時の年齢が低い（中学生以下）
⑥ 初交前の交際期間が短い（1週間以内）または交際せずに性関係を持った
⑦ 妊娠した（させた）経験がある
⑧ 10代で子どもを持ちたいと考えている

（1）ハイリスクな性行動・性意識を持つ生徒の特徴

左記の8項目のハイリスク行動それぞれを、家庭での生活状況／人間関係・自己イメージ／勉強・将来展望／性意識／性行動に分類した各項目とクロスし、χ^2検定を行った結果が表9である。8項目のハイリスク行動・意識の背景については、以下の点が明らかになった（図1参照）。

まず男子の場合、①避妊をしない　②累積セックスパートナー数が多い　③複数のセックスパートナーをもつ　といった項目において、その背後に自己肯定感の低さや対人関係の不和が認められた。

女子の場合、多くのハイリスク行動が諸要素との関係において有意な差をもっていた。①避妊をしない女子は、学校活動や勉強へのコミットメントが低い傾向があった。また、②累積セックスパートナー数が多い　③複数のセックスパートナーをもつ　に該当する女子は、自分の容姿に自信を持っている傾向や恋愛を重視する傾向がある一方で、友人へのコミットメントが弱いことから、異性との交際が対人関係の中心となっていると考えられた。さらに、⑤初交年齢が低い　⑥初交までの交際期間が短い　⑧10代で子どもを持ちたい　に該当する女子は、家庭で経済的な悩みをもっている傾向があった。

つぎに男女に共通して見られた傾向をあげていくと、⑧10代で子どもを持ちたい　と考えているものには、多くの負因が家庭生活・人間関係・勉強や将来展望の各項目に関して認められた。また、⑦自分やパートナーの妊娠を経験したものは、現在も避妊をしていない傾向があり、複数のセックスパートナーを持っているものの割合も高いな

表8　各ハイリスク行動の該当者数と割合

		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧全体	⑧性経験群
男子	実数	72	43	18	64	109	86	15	20	13
	%	34.8%	21.1%	8.7%	32.3%	52.1%	42.1%	7.8%	3.7%	7.6%
女子	実数	54	31	9	62	52	52	12	11	8
	%	29.3%	16.8%	8.7%	34.4%	27.8%	28.4%	6.7%	2.7%	5.1%

①～⑦および⑧の性行動に関する項目については性経験群を、⑧の性行動以外に関する項目については回答者全体を対象として分析を行った。

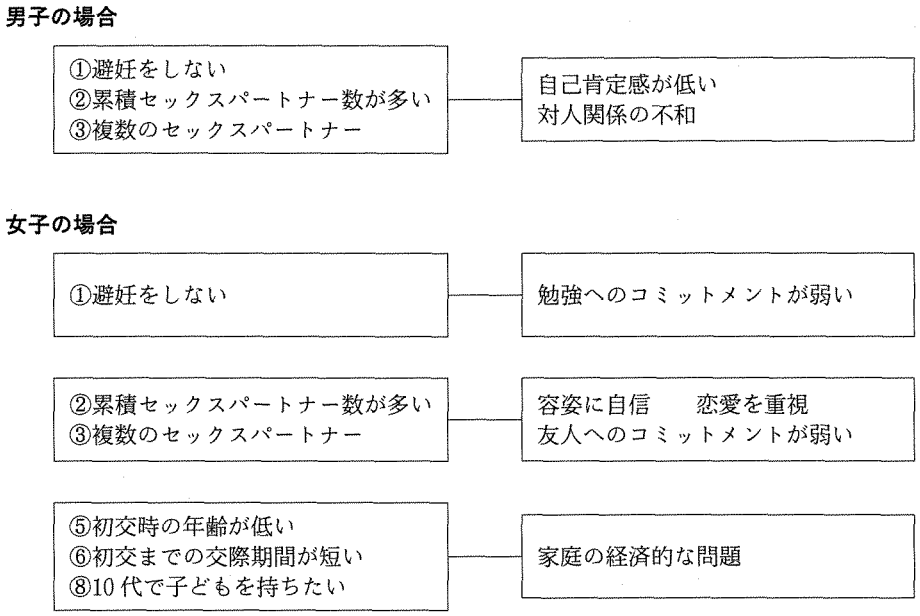


図1

ど、妊娠を経験することによってその後のハイリスク行動が減ったとは考えられず、むしろ男女とも妊娠することを気にかけない傾向が見られた。

（2）生活上の諸要素の連関とハイリスク行動

(1)ではハイリスク行動と生活状況との間に連関があることが明らかになったが、若者の生活の諸要素はどのような連関をもちつつ、ハイリスクな性行動や性意識を形成しているのだろうか。表10は、家庭の状況を代表させる要素として「父親の職業」「経済的な悩み」を、対人関係および自己イメージを代表させる要素として「友人から大切にされていると感じるか」「親から大切にされていると感じるか」「現在の自分が好きか」を、将来展望を代表させる要素として「目標学歴」を用い、生活上の諸要素および性意識・性行動とクロスしたものである。ここでは次のような連関が見られた。

まず、家庭の経済的・文化的な基盤の規定要因であると考えられる「父親の職業」、および家庭の生活状況を大きく規定すると考えられる「家庭の経済的な問題」は、高校生の家庭生活に影響をあたえているばかりでなく、勉強へのコミットメントの強さや将来展望とも強い連関を持っていた。

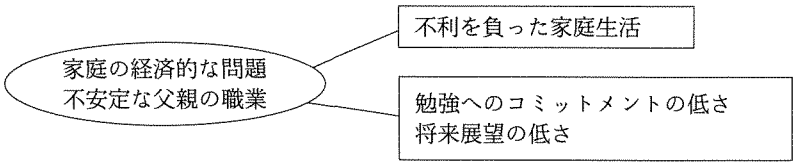
つぎに、対人関係上の問題や自己肯定感の低さは対人関係および自己イメージと相互に極めて密接な関係を持っていた。さらにこうした問題が女子の場合には家庭の経済的な問題と、男子の場合にはハイリスクな性行動（特に避妊を伴わない性行動や、多数のセックスパートナーとの性行動）とつながりを持っていた。

将来展望の指標とした「目標学歴」は、家庭での生活状況や勉強へのコミットメントと深い関わりを持ち、さらに女子の場合には目標学歴の低さとハイリスクな性行動とがつながっていた。

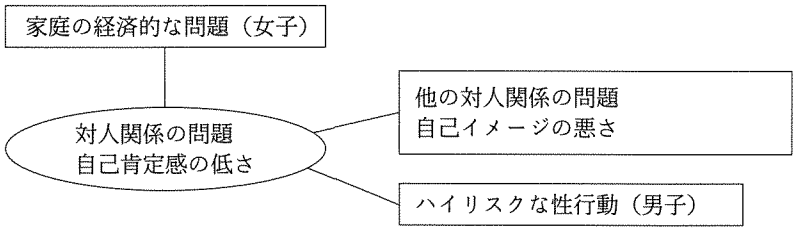
（3）考察

あるハイリスク行動が必ず別のハイリスク行動と非常に密接な連関をもっていたこと――たとえば、避妊をしない傾向にある女子は、初交年齢が低く、短期間の交際で初交に至った傾向があり、複数のセックスパートナーがいる、多くの相手との性交渉を経験した、妊娠経験があるといった項目にも該当しがちであること――は、ハイリスクな性行動をとるものが「ハイリスク・グループ」と呼べるような特定の一群に偏っていることを示している。性経験の有無による生活状況の比較（表9）は、性経験群の生活が社会的不利につな

家庭の状況（家庭の経済的な問題・父親の職業）とその他の要素との連関



対人関係（友人・親との関係）・自己イメージ（自己肯定感）とその他の要素の連関



将来展望（目標学歴）とその他の要素の連関

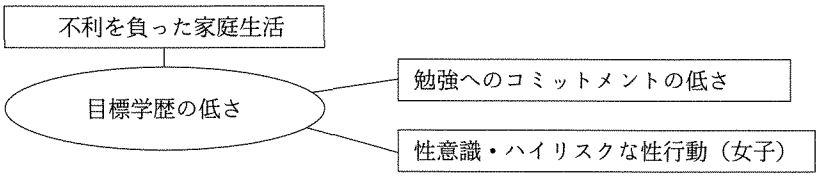


図2

がりがちな特徴を含みがちであることを示しているが、さらにその中でも図1・2のような背景を持つ層にハイリスク・グループの生徒が多いことを考慮すれば、生活において困難を抱えた層の生徒がその中の大きな部分を占めることは明らかであろう。さらに、4節の(2)において変数とした生活上の6つの項目の多くが、家庭の経済的な問題および勉強に対するコミットメントの低さと有意な連関を持っていたことは、これらの問題が生活上のさまざまな問題と深く関わっていることを示している。

5．おわりに

本研究においては近年の調査研究の結果と同様に、交際や性行動が今日の高校生の間で日常化しており、性経験がないものであっても大部分は同年代の若者の性行動に許容的であることが確認された。しかし、性行動にどの程度関わっていくかは彼（女）らの生活状況によって大きく異なっており、性経験のあるものとないものとの間には家庭や学校での生活状況、人間関係や自己イメージ、将来展望など、生活全般にわたって大きな差が存在していた。性経験のあるものは家庭内で経済的・対人的に問題を抱えがちであり、勉強に対するコミットメントが低く、将来展望が定まらない傾向があった。さらに、負因を多く抱える性経験のある生徒の中でも、リスクの高い性行動をとっているものは家庭や学校でより不利な状況にあり、複数のハイリスク行動にかかわる「ハイリスク・グループ」を形成していることが明らかになった。

ほとんどの高校生は性行動を理解・共感できるものとして捉えていたにもかかわらず、実際に性行動をとっているものが生活上の社会的な不利を抱えるものに偏りがちであったことは、何らかの要因が生徒の性行動を促進していることを示唆していた。本稿では目標学歴を指標として分析を進める中で、何が現在の生活の中心となっているかが性経験の有無と強い連関を持っており、そうし

表9　ハイリスク行動と生活上の諸要素

（χ^2検定***p＜0.001、**p＜0.01、*p＜0.05、ᵗ p＜0.1）

		性経験がある		①あまり／いつも避妊をしない		②累積セックスパートナーが5人以上		③複数のセックスパートナー		④性行動の頻度が高い（週2回以上）		⑤初交時に中学生以下		⑥交際開始から初交までの期間が短い		⑦自分またはパートナーに妊娠経験		⑧10代で子どもを持ちたい	
		男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
家庭の状況	自宅外からの通学		*			**													
	ひとり親														**				
	父親の職業		t										**		*				**
	自室をもっている							*						t	**				
	家庭に経済的な問題がある	t	**												*				
	家の居心地が悪い			t						t				t		**		*	
	親の無理解	t	t												*			*	t
	家族の不仲・離婚や再婚		**					*		*			t	*	**			***	
人間関係・自己イメージ	親から大切にされていない			t		*		**						*	*			*	
	教師から大切にされていない			t			*												
	友人から大切にされていない			**				t							*	t			—*
	異性の友人が多い	***	***			**		*		**				t				***	*
	生活の中で恋愛を重視				t		*		*								*	**	
	今の自分が好きではない			**				t						t					
	違う自分になりたい				t	**		*										—*	*
	居場所がないと感じる			t		t		***			*					*		—*	
	容姿がよい			t			t		*	*									
勉強・将来展望	部活や授業がつまらない		***		**				*					t				***	*
	家庭学習をしていない	***	**		***		***			*					**			*	
	勉強机を持っていない				**	t	**										**	**	*
	アルバイトをしている	***	***		**						t		*					t	*
	具体的な将来の希望がない												t		t			**	
	目標学歴が低い		***		***		*									*		**	*
性意識	逸脱的性行動の許容 #	***	***	**	**	**	***	***	***	*	t	**	**	**	*	**	t	*	*
	固定的性別役割分業を好む		**	**														**	***
	妊娠が気にならない	—	—	***	**	*	**	***				*	*	t	*	t	**	*	***
	性感染症が気にならない	—	—	***	*				—*										
	初交時愛情・好意なし					t						**		*	*	*			
	⑧10代で子どもを持ちたい	***	*	t	*		*				*		*		t		t	—	—
	親は自分の性行動に許容的だと思う	***	**	*		*		t			*								t
性行動	①あまり／いつも　避妊をしない	—	—	—	—		***	*	**		**		**			**	***	t	*
	②累積セックスパートナーが5人以上	—	—		***	—	—	***	*	**		***	***	***		***	**		*
	③複数のセックスパートナー	—	—	t	***	**		—	—	*	*	**	t	**		***	*		
	④性行動の頻度が高い(週2回以上)	—	—		**	t	*	**	**	—	—	**		*		*		**	
	⑤初交時に中学生以下	—	—		**	***	***	**	t	**		—	—	**			t		*
	⑥初交までの交際期間が短い	—	—			***		**		*		*		—	—				
	⑦自分またはパートナーに妊娠経験	—	—	**	***	***	**	***	***	**	t					—	—		
	自分が避妊に消極的	—	—	***	***	t	*	**		**						*			
	相手が避妊に消極的	—	—	***	***		**						**	t			t		

#　逸脱的性行動とは「愛情をともなわないセックス」「金銭を介したセックス」「恋人以外とのセックス」のいずれかである。

表10　生活上の諸要素相互の連関とハイリスク行動

（χ^2検定***p＜0.001、**p＜0.01、*p＜0.05、ᵗ p＜0.1）

		父親の職業		家庭の経済的な問題		自分を大切に思ってくれる友人がいない		親が自分を大切に思ってくれない		自己肯定感が低い		目標学歴が低い	
		男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
家庭の状況	自宅外から通学	***	*		*						−t	t	
	ひとり親家庭	***	***	**	t							t	**
	父親の職業	−	−	***	**							***	**
	自室をもっている			−**	−**	−t						*	
	親の無理解	**		***	***	*	**	***	***	*	***	*	**
	家庭に経済的な問題がある	***	**	−	−		*		***	**	**	**	***
	家の居心地が(あまり)よくない			*	***	***	***	***	***	***	***	t	*
	離婚や再婚・家族の不仲	**	***	***	***		t	***	***		**		
人間関係・自己イメージ	親から大切にされていない				**	***	***	−	−	***	***	*	**
	友人から大切にされていない			*	*	−	−	***	***	***	***		*
	教師から大切にされていない					***	***	***	**	***	**		
	異性の友人が多い					− ***	− ***	− *	**	− **	− **		
	恋愛を重視	*	*	**							− *	*	t
	今の自分が好きではない			t	***	***	***	***	***	−	−		
	違う自分になりたい					*	**	***		***	***		
	居場所がないと(わりと)感じる		*	t	***	**	*	***	***	***	***		
	容姿が（わりと）よい					− ***	− ***	−***		− ***	− ***		
勉強・将来展望	部活や授業がつまらない			*		***	***	***	***	***	**	**	
	家庭学習をしていない	**		*				t				***	***
	勉強机をもっていない	***	*	**	*			*		**		***	***
	アルバイトをしている	***	*		t				**		t	**	***
	頑張っていることがない					***	**	**	***	***	**		
	具体的な将来の希望がない					*	**					***	***
	目標学歴が低い(高卒以下)	***	**	**	**	*	**	**	*	t		−	−
性意識	逸脱的性行動の許容		−t		**	*		**	***				**
	固定的性別役割分業を好む					− *					− *		***
	妊娠が気にならない												
	性感染症が気にならない												*
	初交時に愛情・好意なし						*	*	*		t		t
	⑧10代で子どもをもちたい		**									**	*
	親は自分の性行動に許容的だと思う												
性行動	性経験がある			t			−t		*		− *		***
	①あまり／いつも　避妊をしない												**
	②累積セックスパートナー数が5人以上												*
	③複数のセックスパートナー							*		**			
	④性行動の頻度が高い												
	⑤初交時に中学生以下		**				t		*	t			t
	⑥初交までの交際期間が短い		t				**					*	
	⑦自分またはパートナーに妊娠経験					*				t		*	
	自分が避妊に対して消極的	**				t		t		t			**
	相手が避妊に対して消極的												

た生活のあり方を方向付けるものとして、生徒が何に自己実現を見出すかが影響を与えていることが明らかになった。今日の社会において学歴達成は職業的な自己実現を果たす上で有効な手段のひとつとなっているが、経済的基盤が脆弱な家庭の子どもは、高校卒業後すぐに就職することを希望する傾向があり、勉強へのコミットメントが弱く、性行動に引き寄せられやすい状況におかれがちであった。ここから、(生活上のさまざまな制約も一因となって) 進学したい学校や就きたい職業などの目標がもてない生徒が今をどう過ごすかに目を向けて興味の向くことに傾倒し、自由に使える金銭を手に入れること (アルバイト) や自己承認を得ること (恋愛) に向かっていった場合には、性行為を含めた「大人」の世界に彼らを引き込む力が強まる、という道筋が導き出された。さらに、生活上の経済的・心理的・教育的な不利は、早期の結婚志向やハイリスクな性行動を生み出す要因となっており、生活状況が若者の性行動に与える影響が単に性経験の有無にとどまらないことが示された。

日本において若者の性行動に関する研究が未成熟である原因のひとつは、性行動にかかわる若者が一部のグループに限られているという認識 (あるいは事実) が長らく続いてきたことにあると考えられる。しかし、性行動が若者の生活に日常的なものとして浸透しつつある今日、若者のおかれた社会的状況や生活、将来展望という視点から若者の性行動やハイリスク行動を見直すことの意味は大きいだろう。というのは、若者の間で性が日常化すればするほど、その背景にある要因は見えにくくなり、社会的資源の不平等が子どもや若者に対して及ぼす影響が潜在化していくと考えられるからである。こうした視点を持たずして、若者の性行動の帰結として起こる諸問題に対する解決の糸口を見いだすことは非常に困難であり、問題がますます深化・拡大していくことは避けられないだろう。

早期の性行動の帰結としての問題について言えば、選び取る人生など与えられていない状況におかれた「持たざる若者」が子どもをもつことで、子どももまた生まれながらにして不利を背負いながら育つこととなり、社会的不利が再生産されてしまいがちであることがアメリカの諸研究を通じて明らかにされている。さらにこのような状況は、最近の日本国内の低所得母子世帯の研究においても少しずつ明らかになってきている[12]。こうした問題とも絡めて考えれば、今後、ハイリスク・グループの若者へのアプローチは非常に重要になってくるだろう。ハイリスクな性行動の背景には、家庭生活、対人関係、自己肯定感、将来展望など、多岐にわたる様々な要因が相互に絡み合った、複雑で困難な生活状況が見出された。こうした状況におかれた若者をハイリスクな性行動に向かわせる要因は、われわれの社会の制度や構造自体がはらむ問題と密接なつながりをもっており、われわれの社会そのものが生み出した問題でもある。こうした観点に立てば、若者の性の問題を扱うにあたって、広く社会の制度や政策の視点まで含めた検討が必要になってくると考えられる。

注・文献

(1) 1990年代以降の若者の性行動の状況を「日常化」という言葉で表したのは原純輔である。原純輔「『青少年の性行動調査』の問いかけるもの」財団法人日本性教育協会編『「若者の性」白書：第5回性少年の性行動全国調査報告』小学館、2001。

(2) たとえば、NHK「日本人の性」プロジェクト編『データブック：NHK日本人の性行動・性意識』日本放送協会出版、2002年。pp. 248-249。「未婚の男性がセックスをする」ことに否定的なのは、10代後半男性の12%、女性の4%であり、「未婚の女性がセックスをする」ことに否定的なのは、同男性の14%、女性の4%である。その他、現代の若者の性行動に対する意識に関して矢島正見が多くの論文を書いている。たとえば、矢島正見「愛から合意へ：10代の性意識の変化」『学術の動向』6(9)、2001。同「青少年を取り巻く性文化環境：援助交際少女のつくられ方」『刑政』111(5)、2000。同「現代青少年の性意識」『犯罪と非行』115、1998。

なお、家庭の問題、とくに経済的な状況や家族構成と性行動との関係については宮原ら（1999）の研究において明らかにされているが、この問題関心について深く追求した分析は行われていない。宮原忍ほか「若年者の性についての行動と意識に関する研究　第3報　高校生の性行動と意識について」『日本子ども家庭総合研究所紀要』35、1999。

（3）東京都幼稚園・小・中・高・心障性教育研究会『2002年調査　児童・生徒の性』学校図書株式会社、2002。

（4）たとえば、Kann, Laura et al. Youth Risk Behavior Surveillance: United States, 1999, *Journal of School Health,* 70(7). Musick, S. Judith, *Young, Poor, and Pregnant,* Yale University Press, 1993.

（5）Topolski, D.Tari et al., Quality of Life and Health-Risk Behaviors Among Adolescent, *Journal of Adolescent Health,* 29, 2001.

（6）Danziger, K. Sandra, Family Life and Teenage Pregnancy in the Inner-City: Experiences of African-American Youth, *Children and Youth Service Review,* 1(1), 1995.

（7）Luker, Kristin, Dubious Conceptions: *The Politics of Teenage Pregnancy.* Harvard University Press. 1996.

（8）たとえば、麦島文夫・内山絢子「女子非行少年の社会的背景と性役割認知等に関する調査」『科学警察研究所報告防犯少年編』22(2)、1981、伊藤富士江「性非行で補導された女子少年の性行動と性意識」『科学警察研究所報告防犯少年編』26(1)、1985。伊藤冨士江「女子少年による性非行に関する研究」『科学警察研究所報告：防犯少年編』28。

（9）渡辺裕子「異性関係の変容と学校集団の影響」財団法人日本性教育協会編『前掲書』。

(10) 同書。

(11) 高校中退を希望している生徒を含む。

(12) 青木紀「調査ノート：貧困の世代的再生産の構造(1)――北海道A市における離婚母子世帯分析」『教育福祉研究』第6号、2000. など。

（北海道大学大学院教育学研究科修士課程）